

---

# 否定してはいけない

野鶴善明

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

否定してはいけない

### 【Nコード】

N6880J

### 【作者名】

野鶴善明

### 【あらすじ】

出会った人から大切なことを教えてもらいました。それは、「相手の考えを否定してはいけない」、「いいところを伸ばそう」ということです。簡単にできることはありませんが、それができるようになれば、いろんなことがずいぶんよくなるような気がします。

中国語通訳という仕事をしていると、いろんな人の話を聞くことができる。というよりも、興味があるうとなかろうと全身全霊をかたむけて真剣に聞かなくてはいけない。ぼんやり聞いていたのでは通訳などできないから。これがまたいい勉強になる。自分の世界を広げるのに役立つてくれる。

日系広告企業の中国現地法人で勤めていた僕は、去年、広告クリエイティブの技術指導のために日本の本社から派遣されてきた講師の通訳を半年間ほど勤めた。講師のAさんは活きのいい優秀なクリエイターだ。日本へ戻った今は、本職のアートディレクターへ復帰して活躍している。アートディレクターとは、簡単に言えば美術表現といったヴィジュアル面での総合広告演出者のことだ。Aさんは美大出身だった。

彼とは馬が合った。

同世代だったこともよかったのだろう。

一緒に町を歩いていると、Aさんは驚くほど実によく観察する。広告の看板やポスターはもちろん、町のたたずまいや人の様子をよく見ている。そして、Aさんは僕が思ったこととまったく同じことをよく口にした。同じ日本人だからということもあるけど、それだけではない。彼と僕は似たところがずいぶんあった。不思議な縁もあるものだな、いつも心のなかで思っていた。自分と似たような感受性の持ち主に出会えることはごくまれだ。貴重な出会いだ。

初めて中国で暮らしたAさんは、かつて僕がそうだったように、誰でもそうなるように、カルチャー・ショックに悩んだ。

日本と中国では土壌が違いすぎる。

この二つの国は文明の種類が違うと言ってもいいくらいだ。チームワークを重視して周囲を見回しながら物事を進める村社会の日本人と、周囲のことなど眼中になく自分が世界の中心と信じて

いる中国人とでは、仕事の進め方がまったく違う。当然、クリエイティブという仕事に対する考え方も異なる。Aさんは中国とは水が合うようで、中国の生活そのものは楽しんでたけど、中国人の同僚はいつたいなにを考えているのかと、よく相談を受けたものだった。僕は通訳以外に、いわば中国社会学入門の講師を務めたようなものだ。クリエイティブの先生は彼だけど、僕は中国についての先生だ。そんな気分も手伝って、Aさんにはなかのいい従兄弟のような親しみを覚えた。

彼から学んだことはたくさんある。

そのなかでもいちばん心に残っているのは、彼が、

「否定してはいけない」

と、言ったことだった。

クリエイティブのミーティングでは、どんな広告を創ればよいのかということについて、アートディレクター、コピーライター、デザイナーといったクリエイターそれぞれがさまざまなアイデアを出してみんなで話し合う。ミーティングではもちろん、各人が言いたいことを言って活発に討論すればいいのだけど、その時、他人のアイデアを否定するのではなく、どこを伸ばせばもっとよくなるのか、あるいは、もとのアイデアを発展させてどう工夫すればよいのかを言うべきだとAさんは主張するのだ。

「他人のアイデアを否定しちゃいけないっていうのは、私が会社へ入った時、いちばん最初に先輩に言われたことなんです。それで、先輩方の発言をよく聞いていると、優秀な人はやっぱり否定しない。優秀な人ほど否定しません。かならず、そのアイデアのいいところを見つけて、そこを伸ばそうとするんですよ」

熱く語るAさんの話を聞きながら、いいことを教えてもらったと思った。やはり、彼のほうが先生だ。

Aさんは、ミーティングの時に中国人クリエイターのアイデアを見ると、面白い部分を見つけ、もとネタから発展させているんなアイデアを繰り返し出した。アイデアをどう練り上げるかだけを考

えている。Aさんがいる間に、世界的に有名なクリエイターの大御所とベテランクリエイターのコンビが日本からやってきて研修会を開いたのだけど、彼らはもつとすごかった。おもしろいアイデアを褒めるのはもちろん、僕が素人目に見てもどうかnaと思ったアイデアでも、かならず即座にいいところを見つけて褒める。決して否定しない。彼らはいいいところを見つけ出す達人だった。研修会が終わった後、

「さすがですねえ」

と、Aさんと僕は二人でうなずきあったものだった。

もちろん、なんでもかんでも肯定すればよいというものでもない。仕事である以上、幼稚さや粗雑さは許されない。基本はしっかり押さえなくてはならない。Aさんは、若い人に向かってなんども口を酸っぱくして基本的なことを指導していた。

否定してはいけないという考え方は、とてもストイックだ。

誰しも、自分のアイデアがかわいいものだろう。アイデアというのは自分の子供のようなものだから、当然かもしれない。他人のアイデアを見ると、それを否定して自分のほうがもつといいと言いたくなるのも、自然といえば自然だ。だけど、そこはぐつとがまんして、いいところを見つけ出すように努力する。いったん相手の意見を飲みこんだうえで、いいところを咀嚼そしゃくして、どうすればもつとよいものになるのかを考える。なかなかできることではないし、かなりの修練が必要だけど、それがすつとできるようになれば、こんなにすてきなことはない。

この否定してはいけない、という禁欲的な考え方は人生のいろんなところで応用できるのではないだろうか。仕事だけではなく、日常の暮らしのなかで家族が言ったことについても、友達が言ったことについても、恋人が言ったことについても。

思えば、今住んでいる世の中には「否定」が満ちあふれている。日本経済はデフレだそうだけど、日本の世間は「否定」のインフレだ。

大人は世間で「ダメ」と言われ続け、子供は学校や家庭で「ダメ」と言われ続け、どれだけの人々が傷ついているだろう。どれだけの「いいところ」が損なわれていることだろう。競争社会だからしかたないと言う人もいるかもしれないけど、実際の世間では「スポーツマンシップにのっとり正々堂々と戦います」というようなことにはなかなかならない。競争社会と言いながら、実際に行なわれていることは、足の引つ張り合い、つまり「否定」「合戦であることが多い。自分が努力を重ねていい結果を出すよりも、相手を否定して自分の踏み台に使ったほうが楽だから。相手を「否定」しなければ、逆に自分が「否定」されてしまうから。こんなふうでは、鬱病にかかったり、引きこもりになったり、リストカットしたりする人たちが大勢出るのもむりもない。そうなるなというほうがむりというものだ。

もちろん、さつきも書いたようになんでも肯定して認めればいいというものではない。

この世には悪意の塊のような人もいるから、彼らを認めることはできない。悪意を肯定しては、善意が損なわれるだけだ。昔から言われている。悪貨は良貨を駆逐する、と。仕事の場合、技術的な未熟さを肯定するわけにもいかない。いささか大袈裟なたとえになるけど、この飛行機のエンジンは火が噴くかもしれないけどいいよね、では困る。だけど、よいものを目指そうという心から生まれたアイデアや意見なら、それを否定せずに、どうすればいいところを伸ばせるのかを考えてみればどうだろうか。

簡単にできることではない。

かなりの包容力が必要だ。

他人を「否定」したくなる気持ちは誰だって持っている。それも心の奥の根深いところにあるかなり強い感情だ。負けたくないという意地だ。こんな偉そうなことを僕は書いているけど、果たして自分にできるのかとも思う。それに、よいところを伸ばすつもりで意見を言ったとしても、相手に否定したと受け取られることも多々あ

るだろう。

だけど、

「否定してはいけない」

と、時折、心にささやきかけてみるだけでも、ずいぶん違ってくるのではないだろうか。

ほんのちよつとしたスティックさが、自分自身やこの世界に広がりを与えてくれるような気がする。いいところを伸ばせそうな気がする。否定しないということが、ひいては愛や慈悲の心が芽生えることへつながるのかもしれない。

否定してはいけない。

人のことも、それから、自分自身のことも。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6880j/>

---

否定してはいけない

2010年10月8日15時24分発行